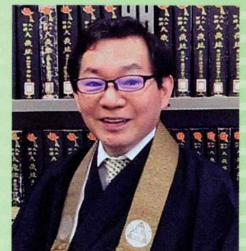


大乘

# DAIJO 法話

## 「お盆」に思うこと



勉学  
みつ い しゅうじょう  
満井 秀城

「お盆」の仏事は、『盂蘭盆経』という經典に起源があるとされています。餓鬼道に堕ちていたお母さんを救おうと、目連尊者はお釈迦さまにその方法を尋ねます。すると、お釈迦さまは、多くの僧侶に施しをするように助言され、安居会の最終日に言われた通り実行し、それによって目連のお母さんは餓鬼道から救われたという有名なエピソードが、この經典に載っています。目連は最初、お母さんに食べ物を与えようと思いました、すぐに火に変わってしまいました。

直接的に与える形ではなく、他者へ施しをすることを勧められたお釈迦さまのご指示には、大切な意味が込められていると思います。こういった逸話から、他宗派では、この「お盆」の仏事を「施餓鬼」と称する場合があります。少し学問的な話で恐縮ですが、この「盂蘭盆」という語の意味について、これまで長い間、「倒懸」（逆さに吊るされたような苦しみ）と考えるのが一般的でした。しかし、近年、故辛嶋静志氏の研究によって、「お供えのご飯を盛る

鉢はち」の意味だとする説が提言され、この説のほ  
うが内容的にも自然で、現在では有力とされて  
います。興味のある方は『季刊せいてん』12  
3号、打本和音氏「『孟蘭盆経』への誤解」（本  
願寺出版）をお読みください。

語学的には、この辛嶋氏の説に説得力があり  
ますが、一方で、「倒懸」という従来の理解に  
も味わい深いものがあると思います。それは、  
遠い将来にあの世で受ける報むくいとしてではなく、  
今の私たちのあり方そのものを表しているよう  
に思うからです。

私たちの価値観は、それほどに「顛倒てんとう」して  
いるのです。物事の本当の価値を見抜くことが  
できず、値段で判断したり、好きか嫌いか、自  
分にとって都合がいいか悪いかといった、自分

中心の価値判断しかできないでいるのが、偽いつわら  
ざる姿です。女性から漂う香水は芳かぐわしいと感じ  
るのに、おじさんの汗は加齢臭で不快に感じま  
す。尊い労働の汗より、よそおった香水のほう  
が心地よいと感じることこそ、価値が顛倒して  
いる証拠です。まさに逆さに吊るされたような、  
世界を逆さまに見ているコウモリのような見方  
と云ってよいでしょう。

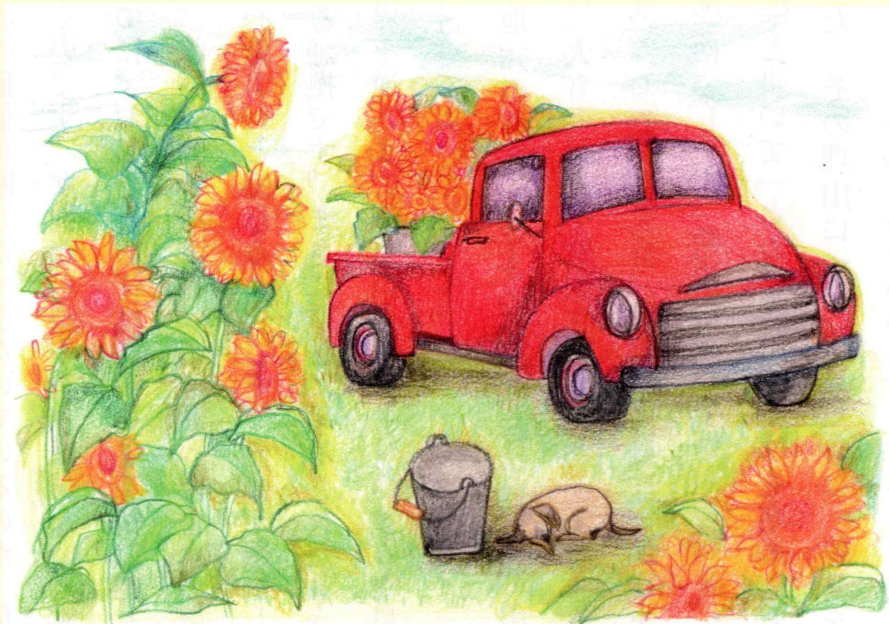
地元のあるお寺さんに、歴代ご住職の中で、  
お二人もの司教を輩出された名刹めいさつがあります。  
そのうちのお一人目、靈雲和上れいうんわじょうは江戸時代末期  
の学僧でしたが、明治になってからの姓を、「鳥  
鼠」と書いて「とね」と読む苗字を名のられま  
した。その理由について、「自分は、物事を逆  
さまにしか見ていないから、コウモリを表す意

味で鳥鼠とした」と語っておられたそうです  
(水原史雄『安芸門徒』)。厳しい自己内省のな  
せる業わざだなど感銘を受けた記憶があります。



ところで、「お盆」の行事は、国民的行事と  
して定着し、この数年こそ、新型コロナの影響  
で、人の移動が制限されていましたが、それま  
で毎年、このお盆の時期は行楽や帰省で、乗り  
物も高速道路も、ひどく混雑したものです。

人口の流動化現象によって、若い世代の人た  
ちはその多くが都会に流出し、地方は高齢化し  
て疲弊の一途だと報じられています。それでも、  
親世代が何とか元気である間は、こうしたお盆  
や法事などには故郷に帰省してくれています。  
しかし、親世代が亡くなると、こうした求心力



カット 長井多美栄

が消滅し、糸の切れた凧たかのように、故郷からは一気に断絶してしまうことが危惧されます。

「お盆」が求心力を持って今の中に、都会に流出した若い世代にご法義を伝えていくための方途を確立しておくことが求められるでしょう。

同時に、浄土真宗としての「お盆」の受け止め方も、しっかり認識しておく必要があると思います。というのも、世間一般の「お盆」の受け止め方と浄土真宗とは大きく異なるからです。

例えば、「先祖の霊が、お盆の期間だけ戻ってくる」という考えは、かなり一般的で、テレビの報道も、みんなこんな感じですよ。京都の有名な大文字の送り火も同じ考え方で、西方浄土にお帰りになる目印として、東山から少しずつ時間差を置きながら、西の方角へと導くように

点火されていきます。また、お仏壇に、「お盆」の間だけ、かげ膳を供えるという風習のある地方があるとも聞きます。ですが、「霊」という実体的概念は非仏教的ですし、浄土真宗では、ご先祖はお盆の間だけこの世に戻られるわけではありませんね。浄土に往生された方の還相げんそう回向えこうは、期間限定ではないのです。

「お盆」は、とかく追善供養の色彩が強いため、浄土真宗では、こういう自力的色彩に誤解されないように、この時期の法座をあえて「歓喜かんぎ会え」と称してきました。普段は遠く離れて生活する子どもさんやお孫さんが、故郷に戻って、お互いの元気な再会を喜びながら、親族全員があらためて仏縁ぶつえんに遇あえた喜びも再確認する。そういう「歓喜の仏縁週間」として過ごしたいものです。